



高橋哲哉

この国の「犠牲のシステム」を問う

— 文責・日野詢城 —

2012年7月14日 コンパルホール・文化ホール

豪雨で総ての交通機関が麻痺するなど、様々な悪条件が重なる中にこれだけの人がお集まりいただきましたことに御礼申し上げます。と思います。

2年前この会場で「沖縄の米軍基地の現状と歴史的な位置づけ」についてお話しさせていただきました。1995年の「少女暴行事件」を契機に膨らんだ沖縄県民の基地負担に対する批判は、県民揚げの運動となり、国に対する要請行動とともに1万人規模の集会などが繰り返されています。

なのですが、沖縄の要求はほとんど無視される形で今日を迎え、さらに普天間基地にオスプレイの配備を押しつけるという一方的な押しつけが今問題となっています。普天間基地の移転問題”について、前回お邪魔した時は、ようやく実現した政権交代で「国外、少なくとも県外移設」という鳩山総理案に、県民の期待が高まっていた時でありました。

が、結果的には「抑止力」という名で再び辺野古への移設ということになりました。辺野古についても設計変更など



差別の反語は“特権”だ
「特権者」の責任を糾す
それが民主主義というもの

日本国憲法 第9条

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

で問題なしとする国側と、辺野古への移転は県内のたらい回しであり、基地の削減には繋がらないと激怒する沖縄。2年の時を隔てているのですが、沖縄の現実にはなにひとつ改善されることなく、さらなる負担を押しつけられた今があるわけです。そういう実態について私は「犠牲のシステム」という表現をしてきました。沖縄の過剰な基地負担のもとで「やまと」の安全を維持するというシステムです。全土の6パーセントにも満たない土地に74パーセントもの基地が集中しているというのは異常であります。基地が存在すること

には様々な問題があり米兵による事件も絶えません。そうしたリスクは沖縄の経済面での格差も生み出してきました。沖縄県民の不安は尽きないのであります。

都市の繁栄と・過疎の街

昨年3月11日、東日本大震災が起きました。地震や津波の被害にも震撼しましたが、震災にともなって東京電力福島第一原子力発電所で大きな事故が起こりました。その日のうちに「原子力緊急事態宣言」というものが出され、私は事態の深刻さに怯えています。地震直後、電源喪失し

た時点でメルトダウンしたのではないかということがいわれていましたが、1号機から4号機までの水素爆発で、膨大な放射性物質が放出され、広い範囲に拡散されました。ご存じの通りその対応の総てが後手になりました。第一原発は大熊町・双葉町にまたがっています。爆発した1号機から4号機は大熊町。北側の双葉町には5・6号機があり、南隣の富岡町・楡葉町には「福島第2原子力発電所」があります。

富岡町は私が小学3年生までの4年間過ごした所です。福島を離れた後、原発が立地される前と、立地後の二度訪れたことのある懐かしい場所なのですが、3・11以降全町避難指示地区となり、村を追われた全ての人は「原発難民」となり、知らない土地にバラバラになつて避難生活を送っているわけです。テレビで福島の子どもの映像を見ると、子どもの頃過ごし

た自分を重ね合わせて見ている自分があるわけです。しかし私は首都圏で40年近く生活してきましたので、自分の中に大きな矛盾を抱えていることに気づいたのです。大都市を支えるために経済的に貧しい過疎地を候補地とし、候補地は誘致しなければ経済成長から取り残されるという焦りに乗せられ原発を立地する。そのことよつて都市が栄えるという構造です。東京電力は福島・新潟に大規模な原発を持っていますが、福島も新潟も東北電力のエリアです。福島や新潟の人はそこで作られた電力を使うのではなく、東北電力の電

気を買っているということですから。東京から遠く離れた場所に発電所をつくり都市の安全を担保しながら大量の電力を消費するというシステムです。事故のあったあの当時、東京電力は青森県の下北半島にも原発を作ろうとしていました。豊かさを求め、高度な文化を求

めて都市は発展する。発展した都市に村から人が流れ、過疎化した村は村を救済するために原発の誘致を行う。その結果、過疎の問題が解決されるのかといえ

ば、むしろ格差はひろがり村が疲弊するという構造を抱えています。そして事故が起こったあとに原発難民として放置されるという「棄民」とも呼べる格差。チェルノブイリの事故のとき、不安になりました。国内ではJCOの臨界事故で2人の方が亡くなり、亡くなるまでの治療の様子が報道され、強いショックを受けましたが、この度の事故が起こるまで、私自身の問題として捉え切れていなかったことに気づき、「慚愧」の念を持たずにおれませんでした。東京圏で豊かさを享受しながら福島のことを忘れていたと。3・11までは典型的には沖繩を犠牲にして、日本の豊かさと安全が担保されていると

一つ、原発というのも典型的な犠牲のシステムが、都市を支え日本の豊かさを支えていたのだと考えるようになったのです。



国策としての

犠牲のシステム

私は「犠牲」という問題に関心を持つてきました。社会の中で、ある人の利益のために別な人が犠牲になる。ある人の利益が別な人の犠牲の上のみ成り

立つ。そういうシステムの問題です。1945年までの日本のシステムはこういう犠牲のシステムであったことは明らかであります。「国が危機にさらされたときは、自分たちの全てを棄てて国のために尽くしなさい」と、徹底的に子ども

頃からたたき込まれました。それが美しいこと、尊いことだとされた訳です。その典型的な存在は軍人であり、領土を拡大して帝国の繁栄に尽くすということが任務であり自己実現の唯一の道だと叩き込まれて戦地に向かったわけです。それを支えた留守家族も同じです。国の繁栄のためには、兵士の犠牲はもとより国民がそれを支えるのが当然義務だとされていたのです。勿論相手の国々の人々が犠牲になるということがあるわけですが、その犠牲を正当化するために「靖国というシステム」を作り、公然とそのシステムを正当化していたわけです。

戦後の沖縄・復帰後の沖縄

それらのシステムは敗戦で破綻し、新しい憲法が策定され、国民の基本的人権というものが犯すことのできないものとして規定されるわけです。憲法13条に「すべての国民は、個人として尊重され、自由及び幸福追求の権利が保障される」という規定が設けられ、ひとり一人の権利を犠牲にするということは不可能になっただけなのです。

ところが日米安保体制の中で沖縄の犠牲が強いられることになった。当初は日本国憲法の影響下になかったわけで、アメリカの支配下のもとで極東の基地の島としての機能を持たされ、ベトナム戦などの前線基地とされたわけですが、72年に日本に復帰して以降は公然というわけにはいかないわけでしょう。しかしいつの間にか反対運動などを押し切つて厳然とした犠牲のシステムを確立し、復帰前

より拡張拡大の方向で基地負担を求めてきたという事だと思えます。何が犠牲になるかといえば生活や財産、健康や生命、人としての尊厳や日常生活そのものが犠牲となり、生きる希望が犠牲になるということです。基本的人権そのものです。

取り返しのつかない

過酷事故

原発がどういう犠牲を生むのかということについて、私は4つの点で犠牲が組み込まれていると考えています。まず、事故、これを「過酷事故」と呼んでいます。事故が起これば、立地地の人々は被曝などの犠牲を被る。どういう過酷な状況が生まれるのか、チェルノブイリの時にわかつていたはずなのですが、技術先進国の日本ではあり得ないと思ひ込んでいた。いわゆる「安全神話」に飲み込まれてしまつてい

たわけです。しかし、昨年の3・11の震災で福島事故が起こり、どれ程の犠牲が強いられるのかを思い知らされることになりました。福島県内外におびただしい人が避難生活を送り、疲れ切っています。私は昨年4月、交通手段が復旧してから南相馬市などの染量の高い地域や、避難先の福島市などにすぐに入りましたが、避難すべきかどうか悩みに悩んでいる人たちにお会いしました。今もその状況は続いているのですが広大な地域の人々が放射線被曝にさらされ、健康被害や生活の手段を奪われるなど膨大な被害を生み、その犠牲を強いているわけです。事故による被曝の問題は福島県だけでなく周辺の幾つもの県に拡がっているわけです。過酷事故は2万年に1度しか起こらない等と言われていたけれども、10年に1度のペースで起こっているわけです。今年の2月に韓国でも

危やという事故が起きています。電源をすべて喪失するという事故でしたが12分で電源を回復したため、メルトダウンには至らなかつたというケースです。しかし韓国のこの事故は地震があつたわけでも津波があつたわけでもなく定期点検中に起きた事故であつたわけです。そうだとすれば、過酷事故は地震がなくても「恒に起こりうる」と考えるべきだと思えます。過酷事故は何時、何処でも起こりうると思えると、そういう可能性が全国54カ所にあるというのが日本の現実だと考えられます。

原発作業員の過酷な被曝

第2の犠牲は、今回の事故で多くの人が知ることになったのですが、原発作業員の被曝問題です。定期点検や日常的な点検など、原発を稼働するには様々な作業があるわけですが、その時、正常な運転をして

いても作業員の被曝は避けられないということですから。1970年代にはその問題についての報告がありました。その報告では原発労働者の過酷な被曝問題とともに、一刻も早く脱原発に向かうべきだという警告があつたのですが、マスメディアはこういう事を全く取り上げず、多くの国民も耳を貸さない状況が続いたわけです。今回の事故を受け、政府は許容される作業員の年間の被曝量を大幅に引き上げました。これまで、年間50ミリシーベルト、5年間100ミリシーベルトまでとしていたものを、一気に年間250ミリシーベルトまで引き上げました。そうでないと作業ができませんからです。一人あたり平常時の5倍の被曝を許容し、それを強いる形で投入された作業員数は1年間で1万6千人を超えています。沢山の人を規定の数値ギリギリまで被曝させ次々に新しい人を投入しながら

作業をするという実態が露わになったわけです。

ウラン採掘にかかわる問題

第3の犠牲は、ウランの採掘にかかわることです。ウランの採掘地というのは環境汚染が避けられませんが、日本国内でも岡山県の人形峠というところで採掘していましたが、採取料が少ないなどの問題もあり採掘を放棄しました。今でも採掘跡は放射線量が非常に高く、手つかずのまま放置されています。

今は、カナダやオーストラリア、アフリカ諸国からウランを輸入しています。が、ほとんどの国で先住民を追い出し、権利を奪って採掘されているという問題があります。

処理できない放射性廃棄物

4番目には、廃棄物の問題です。稼働すれば使用済み燃料というものが残りますが、これをどう処理する

のかということ。使用済みの燃料を処理しても高レベルの放射性廃棄物が残るわけです。近くにいらると数時間で死んでしまうようなレベルのものが次々に出てくるわけです。現実としては使用済みの燃料をプールの中で一時保管しているわけですが、処理しなければならぬ高レベルの廃棄物が、保管する場もない状況で貯まり続けているわけです。これをどう処理するのか。そのことについて人間はまだ何も知らないのです。今のところ土の中に埋めるしかないと言われていますが、10万年経たないと安全なレベルにならないといわれています。10万年というのは人類の歴史と同じ年数になります。そういう代物を何処に処理するのか、地下深くに閉じ込め最終処理をするとしています。が、最終処理場を何処にするのかという問題について全く見通しのつかないまま、試掘という形で北海道

の幌延というところと、岐阜県の瑞浪市というところに最終処理のための掘削が行われています。地層の堅いところと柔らかいところでの試掘で、最終処理場にしないという約束なのですが、断食の反対運動と同時に誘致派の動きが活発になっていきます。試掘であっても電源3法による交付金が大量に流されています。福島県は事故以来すべての原発を廃炉にすることを決定しました。廃炉になれば当然汚染された高レベルの廃材や燃料などの廃棄物が出てくるわけです。それを幌延に持つてこようと、誘致派の人は今回の事故で勢いづいている訳です。とてもない量の放射性廃棄物を10万年間も安全に保管するなどということはありません。地殻変動や地震は免れませんが、アメリカ政府と日本政府は共同して極秘裏にモンゴルに最終処理場を作ろうとしましたが、その計画は

頓挫しました。現代文明の恩恵等とは遠い存在の国々に廃棄物の犠牲を強いるという構造を持っているのかもしれない。これが第4の犠牲のシステムです。

ウラン採掘の被曝労働、原発を稼働することに拠る被曝労働者、過酷事故による地域の住民の問題、そして稼働することや廃炉などによって生み出される膨大な廃棄物の問題。少なくとも4つの犠牲が組み込まれていないと稼働できない原発。恒に被曝のリスクがありながら、その対処の仕方がなにもひとつ解っていないままの暴挙が、原発のシステムであり、犠牲のシステムだと言えます。

「私が責任をとる」???

北海道の泊原発が止まって日本の原発の稼働ゼロという時期がありました。が、つい先日福井の大飯原発再稼働で状況がまた変わりました。総理が「安全が確認

された」と言い「私が責任を取る」と再稼働を強行したのですが、責任を取るというのは全く疑わしいことです。犠牲のシステムの中に存在する原発は正当化できないと思っています。憲法によって保障されたはずの人権が侵害されるということですね。推進派の理窟として、チョット前までは化石燃料は地球温暖化の元凶であり、原発はクリーンエネルギーだと。そして化石燃料は枯渇するが原子力は再処理することで新たな資源となり、永遠に資源が保たれ枯渇することはない等と言っていました。今は、クリーンなどとは言えなくなり、再処理問題も行き詰まっていますので「電力不足になる」だけを強調します。何処まで信頼できるのか解らない数値で電力不足と国民を煽動してきたのですが、私は誰がそれを望んでいるのかをはっきりしなければならぬと思います。(12月・次号に続く)

高橋哲哉さんの講演会 感想文

7月14日「宗教者9条の会・大分」主催第7回の、講演《この国の「犠牲のシステム」を問う》が開かれた。午前中から大雨警報が出ており、講師の到着が危ぶまれたが、飛行機はさほど揺れなかったという。開場の6時には高速道路もJRも総て不通となり交通アクセスは麻痺状態であった。激しい雨の中ポツポツと人が集まる。2階の会場で予定されていた公演は中止となったと聞く。開演の6時30分、80名余りの人が集まり高橋哲哉さんの講演が始まる。24名の人が感想文を残してくれた。「広報が充分でなかったと思う。お話を聞き終えて、更に悔しい思いです」という感想も：

※ 高橋さんのTVのご出演や評論などで存じ上げていました。先日『犠牲のシステム 福島・沖繩』を読み、是非お話を伺いたいと：原発のことは福島の事故以降、沖繩の問題はかねてから関心がありました。どうすれば

いいのかわかりません。解りませんでした。本を読み、講演を聴いて双方に通じる問題点というか、構造がどうも良く解り、手がかりを得たような気がします。せつかくの機会に、水害のせいもあるのか、参加者が少なかつたことがとても残念です！もったいない！

※ 沖繩やオスプレイのことも気になっていたのですが、時間の関係もあり仕方なかつたかな…と。

※ 原発は最大の環境破壊であるということを認識しなければならぬことを痛感しています。土と水と空気の大切さを思い知るために、「うたごえ」を通じて「放射能の問題」を訴えています。うたの力で少しでも生命について考えたり、語り合ってもらえる契機になればと思いい活動を続けています。

※ 『犠牲のシステム』のお話は、私たち日本人の甘さ・ものを決めたり何かを導くするときの考え方・姿勢のあまさを指摘されていると思

いました。「総懺悔論」も日本人の甘さ故に起こった責任感覚で、責任の所在を曖昧にするだけだと感じました。

※ 原発の導入時に、我々の甘さがあつたことを認めただ上で、嘘をつき騙してきた側の政府や財界などの「原子力村」の面々に、責任をとらせるよう働きかける責任を我々が果たしたいと感じました。

※ 福島の人々の苦しみや悲しみを、私たち自身の問題として考え生活していくことが大切なことだと思ひます。国が国民を騙しているというところを見極める。騙されないといふことを課題にしてゆきたいと思ひます。

※ 福島や沖繩問題の本物のムジナは国であり、国策であり、そしてその向こうに米国の意図を感じます。騙した側の問題、騙された側の責任、責任の取り方とたまされない力を、多くの犠牲を強いられる人々の中を生きていく大人として、出来ることをしていききたいと思ひます。

広域処理

東日本大震災後の廃棄物広域処理が全国に呼び掛けられ、大分県では津久見市が唯一手を挙げました。「広域処理とは？放射能の問題は？」と様々な疑問や不安を抱いた市民で「津久見の海と山といのちを守る母の会」を立ち上げ活動を始めました。

藤田祐幸さん、池田こみちさん等々を呼んでの講演会の開催、新聞の折り込みチラシでの情報提供、市長への要望書や議会への請願書の提出、市議会の傍聴：怒涛のような毎日でした。

その中で見えてきたのは、被災地支援とは言うものの、行政は、安全を連呼し、責任を、市は県に、県は国に他人任せにする。企業は利権を求め、マスコミは偏った報道をし、いのちが一番の判断基準になつていないことです。

そもそも、がれきは燃やすのではなく、みどりの防潮堤構想に利用すれば多額のコストをか

けて全国にばらまく必要はなくならし、九州は少しでも安全な地域として守ることで被災者を受け入れる、又、安全な食糧を提供することができのです。

その後、宮城県側から可燃物の処理にめどが立つたと連絡があり、津久見市での受け入れが白紙となるまでの4ヶ月間、小さな町を揺るがせたこの問題。原発事故の終息が全く見えない今、直接の被害で苦しむ人々の事を思うと、ほんの些細なところでも起きた関連の問題について一つひとつ声を挙げていく事が脱原発への一歩になるのだと思つていきます。

私たちの会は今回の事をきっかけに老若男女様々な立場の方々との出会いがありました。そういう方々との緩やかな繋がりをもちつつ被災地支援や脱原発を大きな軸として小さな一歩となる活動を続けていきたいと考えています。

「津久見の海と山といのちを守る母の会」

共同代表 古谷久美子

福島の子どもたちを御招待 わくわく湯布院報告

「一週間の保養でも、子どもたちの免疫力は爆発的に回復される」という医師の助言もあり始められた福島の子どもたちの招待。2度目の今年5月の半ばに準備会が立ち上げられ、7月25日から31日の6泊7日の日程で実施されることが決まった。間もなく実行委員会が立ち上げられ、大谷派の僧侶を軸に、コープ役員や・NPO法人・社団法人・観光業者や会社員などの15名が世話人となった。「これまでに1度も休暇中の招待事業に参加出来なかった子どもさん呼び



たい」ということで、福島の子どもたちを招待する。南相馬や、いわき市など比較的量の高い地域からの参加者、大人11人に27名の子どもたち。13名は子どもだけの参加。郡山に集合するまでは顔が見えてこない。昨年の参加者の手伝いもあり、子どもたちも和んだ。新大阪からフリーで別府港へ、由布院児童クラブが事前に作成した歓迎のプラカードで迎えられ、思わず涙する人も。協賛ホテルでお風呂と朝食、招待の高崎山・うみたまごで思いっきり楽しみ、温泉につかったあと湯布院へ。その夜から湯布院

の見成寺で4連泊。スタッフを含めると50名近い食事、12食分を寺の門徒や地域のご婦人達、そしてお寺の坊主さんたちが支えてくれた。資金面でも公的資金はなく、総てカンパや寄付によって賄われた。到着当日、日暮れも間近な庭遊びで子どもたちははじけた。3名が擦傷を負った。不安もよぎったが、夕食後のミニコンサートは盛り上がった。翌日の滝遊び、途中からの雷雨にもめげず、水遊びに大はしゃぎだった。28日は、事前に「福島」の今を学び歓迎のプラカードを描いた近くの児童館へ、その間、お母さん達は招待を受けた老舗の旅館でゆったりドリンク。街を散策し疲れを癒す。夕食後に全員で「土曜夜市」とホテルの温泉を楽しむ。29日



の日曜には、スタッフを含む全員が、由布院名物の辻馬車に乗り、その後はプールに行ったり街を散策したりの自由行動。夜には老舗が提供してくれたオードブルを囲み、お別れ会。眠りがさめれば、最終日。お礼のお勤めをして、ご招待最後のハーモニーランドへ。ジェットコースターに5回も乗ったという子どももいる。期間全体の部屋遊びも豊かだった。APUの学生さんが泊まりがけで遊びに参加。ベトナム・ミャンマー・中国・メキシコと国際色も豊かであった。別実際のフェリーのデッキから、全員合唱の「ありがとう!!」が、それまで我慢していた見送りのスタッフも涙をこらえきれず、禁句の「またね」を繰り返す。「友達が減って、学校も寂しくなった」という一言が、福島の実験の厳しさをあらわしているのだと思う。

(報告・日野詢城)

衆議院選挙が12月4日公示、16日の投票と決まりました。第三極の連携などが取りざたされているが、無節操な妥協の大連立が危惧される。私たちの一票がこれほど大きな意味を持つときは無い。原発が最大の焦点かと思うが、支持できないならば「白票」を投じるといふ怒りの表現も(編集部)

編集後記

年会費納入・カンパを よろしくお願いします。

宗教者9条の会・大分事務局

〒879-5102

由布市湯布院町川上 3561 見成寺

TEL 0977-84-2257

FAX 0977-84-5203

年会費 3,000円

郵便振替口座 01720-1-111731

2012年度
会費納入者

泉 暁子
岩尾 豊文
日野 詢城
藤音 浄明
藤吉 文佳